

貧困地域の診療を通して見えた鍼灸の可能性

あんずの種 得田慧 松原麻実

【目的】近年、海外ボランティア活動への関心は高まり海外での活動を希望する鍼灸師が増える一方で、日本国外での鍼灸治療経験者は未だ少ないのが現状である。今回NPO法人イルファアの第24回フリーメディカルキャンプに参加し2015年9月13日から9月19日の7日間、ケニアナイロビのスラム地区にて鍼灸治療を行った。イルファアは、ナイロビにあるプムワニ村に拠点を置き、現地の方へ継続的に診療を行ってきた。活動を通して見えた無医地区における鍼灸の役割と今後の可能性について報告する。

【方法】プムワニ村で6日、リムル市で1日、現地に住む方を対象に治療を行った。施術は、ディスプレイのステンレス鋼線製の豪鍼（太さ0.12mm長さ30mm）を用いて本治法標治法を含めた局所、遠隔治療を行った。症状に応じてミニ灸や皮内鍼を使用した。

【結果】鍼灸受診者の総数は404名であった。主訴は、腰痛124名31%、背部痛75名19%、膝痛71名18%、四肢痛58名14%、肩痛28名7%、その他48名11%であった。その中で、HIV感染症罹患者は10名であった。メディカルキャンプ全体での受診者数は2500名であったため、鍼灸受診者は全体の16%であった。

【考察・結語】ケニアという国の経済的な発展や地域性は日本と異なっているが、鍼灸という代替医療の役割はどこの国でも変わりはない。寒暖差や

生活環境など悪化要因は多くある中で、鍼灸治療を通してその地域性に応じた
日常生活のアドバイスを伝え続けることは無医地区に住む人々の健康への意識
変革に繋がることだと感じた。1年に1度のメディカルキャンプでの鍼灸治
療だが、24回と継続的に行うことで鍼灸に対する認知度や効果への理解は
確実に広まってきた。未病治の考えを理解し、鍼灸を通して患者自らが実践す
る意識を構築するお手伝いこそ、鍼灸の大きな一つと役割といえる。

キーワード

ケニア 海外ボランティア イルファール メディカルキャンプ 地域性